

# 汲古一心

## 『櫻』

よく緩い坂道などの登り尽きた所に、広い原っぱがあって、そしてその真ん中に、馬鹿に大きな直幹の櫻がスクスクと立っている爽やかな風景を見たことがありますか。

櫻は万葉の歌人達を想い起こさしめますね。何となくおらかな素朴な幹とあの見かけによらない繊細な小枝の中にひとつひとつ雄渾な力を見せている姿は男性的な自然の雅致を最も多く描き出したものではありますまいか。

実際万葉の素直に大自然をうけ入れた朗かな韻の高い歌のたましいは、あの櫻の木、独りつきりに授けられて守ってきたものなんですよ。

私の万葉の歌を愛する気持ちは、しぜん一本の櫻を育てさせてい

多感の人はみな佛子である

一九六二年の暮春片度の詠に「七言建會  
にソフト博士を詠れた時 殊に「この一語には  
たいん感動した」有難いことぞ有る  
昭和五十四年一月 松蔭佛 徒記

ます。まだ生まれて八年ぐらいな若々しい樹なんですけれど、もうとつくに憶良のような青年を気取っています。春先きの若芽のころなんか本当にあの下へ榻を置いてだんだんと心ゆくばかり温かな陽光を浴びていたらどんなもんだろうなんてさえ思いますよ。

ですけれど秋が暮れて霜の来る少し前になると葉の色がちよっと洒落くさいくらい、おつな渋味のある黄葉をして、毎日くれてやっちまったようになくなってゆくのが、外の樹に見るような淋し味がなくって、むしろ陽気な感じのするのがたまらなく好きですね。まるで木の下道へどんぐり拾いに来て、はしやぎ切っている子供達の明るい癡高な呼声でも聞えてきそうな、からからに乾いた清々した秋をみせるのがね。

冬の櫻ときたら「今晚から雪になりましょうね」というような顔をして、鴉を小さくクツ着けてる風景ですね。

〔詩・散文〕、昭和六年  
『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。